

古辞書と仮名遣い：近世の節用集の場合

崎村，弘文
鹿児島大学講師

<https://doi.org/10.15017/10489>

出版情報：文献探究. 12, pp.1-12, 1983-07-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

古辞書と仮名遣

— 近世の節用集の場合 —

本稿において筆者は、国語表記史研究の一環として右の問題を取り上げ、具体的資料によりつつ若干の考察を行なつてみたいと思つてゐる。

—

中世から近世にかけ、音韻の混乱に伴なつて生じたはずの仮名表記の混乱については、なお、不明の点が少ない。筆者は、その具体的様相を、古今和歌集関係の抄物や御伽草子等の文献に徴して明らかにしたことが有るが、ここでは、常々「書承性の高さ」を指摘される文献に古辞書について、同様の試みを行なつてみようと思ふ。

資料とするのは次の四点であり、明らかにしようとするのは以下の諸点である。

- ① 『篆字節用千金寶』架蔵本(主資料)
- ② 『倭節用悉皆袋』同(参考資料)
- ③ 『増字永代節用』同(同)
- ④ 『大全早引節用集』同(同)

(1) 古辞書(ここでは、特に①④の如き近世の節用集)に見える付訓仮名の表記様式は、どのようなものであるか。

- i. 混乱の存否。混乱有りとすれば、その度合い如何。
 - ii. 書承性の存否。書承性有りとすれば、その度合い如何。
 - iii. 該様式と当時の仮名遣い書との関係如何。
- (2) 古辞書(近世の節用集)の性格をめぐり、(1)との関連において

論すべき点は無い。

崎村弘文

【注】

1 本誌6・8・9号の拙稿参照。

2 「先行文献の内容を、ほぼそのままにしそれに近いかたちで受けつぐ傾向。また、その度合い」を云う。

3 延享三年(一七四五)板。大本一冊、墨付き一〇一丁(首尾数字を欠く)。辞書本文部龍頭に「日本國國々土産名物尽」。「小笠原流書法大概」等の雑書の記事を付載するが、中に、仮名遣いに関するもの(辞書本文部六六丁裏一七九丁表)が有り、注意を引く。なお、辞書本文は八改編節用集系陰陽本類Vに属するもので、左記の門立てを持ち、乾坤門が「陰陽雷電稲書」と始まる。

顛倒セル例モアリ。

合シテ官倫の倫名トモ。

乾坤・神祇・時候・官名(官位)・人倫・氣形・草木・支解

顛倒セル例モアリ。

・衣食(食服)・器財・言語・數量

4 宝暦一二年(一七六二)板。大本一冊、墨付き一六二丁。本文の構成は、①に類する。辞書本文は八乾本系乾本改編本類Vに属するもので、左記の門立てを持ち、乾坤門が「乾陰陽一氣雷公雷」と始まる。

乾坤・時候・神祇・官位(官名)・人倫・人名・支体(人支)・名字・食服(衣食)・草木・氣形・器財・數量・言語

言辭)・秋氏 順序ハ、乾坤ガホホ頭位、言語(言辭)ガホホ末位ニ定マレ
ル外ハ、變動多シ。

5 板年不明(『圖書給目録』には、天保二年一八三一板以下

三種の板が登載されている)。大本一冊(端本。「る」く「す
」京」の部分のみ存)、墨付き一六七丁。本文の構成は、①

②に類する。

6 文化一四年(一八一七)板。中横本一冊、墨付き三四〇丁。雜
書的事のごく少ない本文構成を取る。辞書本文は、ハ語形引
き類早引節用集類Vに属するものである。

二

資料①に見える付訓仮名の表記様式を体系的に整理して示せば、
次のようになる(紙幅の関係上、教値により示し、詳細は別稿に譲
る)。

(1) [dyi] の表記

i. [dzu] の表記

「じ」表記

漢語 和語 総計

○ 296 (93.7)	}	316
× 20 (6.3)		
○ 62 (27.3)	}	71
△ 2		
× 7 (9.9)		387

ただし、連濁形およびそれに準ず
るものを除けば、左の如し。

○ 203 (92.7)	}	219
× 16 (7.3)		
○ 36 (80)	}	45
△ 2		
× 7 (15.6)		264

(十イ)内ノ数字ハ、イの付された例数の、
内総計に占める割合。單位%、以下同様。

「ぢ」表記

ii. [dzu] の表記

「ず」表記

○ 60 (93.8)	}	64
× 4 (6.3)		
○ 45 (88.2)	}	51
× 6 (11.8)		

連濁形およびそれに準ずるものを
除けば、左の如し。

○ 43 (91.5)	}	47
× 4 (8.5)		
○ 42 (87.5)	}	48
× 6 (12.5)		

○ 10	}	10
× 0		
○ 50 (90.9)	}	55
× 5 (9.1)		

連濁形およびそれに準ずるものを
除けば、左の如し。

○ 5	}	5
× 0		
○ 38 (88.4)	}	43
× 5 (11.6)		

○ 23 (95.8)	}	24
× 1 (4.2)		
○ 163 (98.2)	}	166
× 3 (1.8)		

連濁形およびそれに準ずるものを
除けば、左の如し。

○ 20	}	20
× 0		
○ 104 (98.1)	}	106
× 2 (1.9)		

(2) [0:]の表記

i. 「a」
「a」
「a」
「a」
「a」

ii. 「o」
「o」
「o」
「o」
「o」

iii. 「e」
「e」
「e」
「e」
「e」

iv. 「u」
「u」
「u」
「u」
「u」

(3) [ju:]の表記

i. 「i」
「i」
「i」
「i」
「i」

ii. 「y」
「y」
「y」
「y」
「y」

(4) 合拗音の表記

i. 「くわ」
「くわ」
「くわ」
「くわ」
「くわ」

ii. 「ぐわ」
「ぐわ」
「ぐわ」
「ぐわ」
「ぐわ」

(5) 語中尾の表記

i. 「わ」
「わ」
「わ」
「わ」
「わ」

和語「わ」例中には、「わ」を	7	9	196	205
は	2			
わ	38 (19.4)			
は	158 (80.6)			

本来 iu	23 (85.2)	27	151	41
juu	4 (14.8)			
本来 iu	83 (55.0)	7	158	158
juu	68 (45.0)			
本来 iu	0	14	7	7
juu	14			

本来 au	45 (24.3)	185	416	189
ou	20 (10.8)			
本来 au	116 (27.9)	79	495	495
ou	282 (67.8)			
本来 au	0	4	98	98
ou	11 (13.9)			
本来 eu	120 (64.9)	4	0	0
eu	18 (4.3)			
本来 au	681 (88.8)	767	0	0
ou	56 (7.3)			
本来 au	98	98	0	0
ou	0			
本来 eu	30 (3.9)	0	0	0
eu	0			

iii. 「u」の表記

「う」表記

「ふ」表記

「ハ(は)」表記

ii. 「i」の表記

「い」表記

本来 う	0	36	14	6
ふ	0			
う	0			
ふ	6			

本来 う	36	36	14	50
ふ	0			
う	14			
ふ	0			

本来 ゐ	0	0	47	47
い	0			
ひ	0			
ゐ	0			
本来 ゐ	0	47	47	47
い	0			
ひ	0			
ゐ	0			

ひとます右の表には含めなかつた。
ろを「い」とした例15も存するが、
「の如く、「へ」と有るべきところ。
漢語「ひ」の項の例は、「油石灰
。なお、和語表記では、「油石灰
ひ」と有るべきところ。

本来 ゐ	10 (1.2)	815	28	1061
い	804 (98.7)			
本来 ゐ	12 (4.9)	42	70	70
い	23 (54.8)			
本来 ゐ	170 (61.0)	4	0	0
い	84 (34.1)			

本来 わ	0	0	57	57
は	0			
わ	3 (5.3)			
は	54 (94.7)			

後部成素とする複合語27例を含む。

- 「フ」表記
 (一)「白駒」「北殿」「北極」「勅許」「勅勤」「學校」「蜀江」
 錦」「獨歩」/「竹篾」「逼迫」 of「平入声+F」の「P」
 …「フ」表記4、「七入声+F」の「セ」…「フ」表記14)
 iii. 連声の表記
 不反映表記
 (「因縁」「安阿弥」「安穩」「雪隠」)

4

以上、いずれも、のべ例数を示すが、これにより次のように云うことができる。

資料①に見える付訓仮名の表記様式は、左の如き特徴を持つ。
 即ち、いわゆる歴史的仮名遣いに照らして、全般に若干の混乱を有するが、

- (1) [dʒi] [dzu] の表記については、本来の区別(四つ仮名の区別)が、90%前後の割合いで保たれている。
- (2) [O:] の表記については、本来の区別(オ段長音の開合をめぐる表記区別)が70%と80%の割合いで保たれている。
 (本来の表記を保つ割合は…漢語に関して、au系 $\frac{48}{842}$ (80.9)、ou系 $\frac{22}{358}$ (78.8)、eu系 $\frac{120}{168}$ (71.4)。和語に関して、au系 $\frac{99}{109}$ (89.9)、ou系 $\frac{48}{100}$ (48)、eu系 $\frac{22}{44}$ (50))
- (3) [ju:] の表記については、和語のそれに關してなお本来の区別(iu連母音・ウ段拗長音をめぐる表記区別)が保たれているものの、漢語のそれに關しては区別が失なわれ、概ね「iう」「iふ」表記に依る傾向が見える。
- (4) 語中尾の [wa] [i] [u] [je] の表記については、本来の区別が失なわれ、和語のそれには「わ・い・ふ・へ」を、漢語のそれには「

わ・い・う・ゑ・を」を当てる傾向が有る(左表参照)。

和語	漢語	語種		[wa]	[i]	[u]	[je]	[wo]
		表記	発音					
$\frac{340}{(95)}$	$\frac{7}{7}$	わ						
$\frac{222}{(25.5)}$	$\frac{0}{2}$	は						
$\frac{23}{35}$ (65.7)	$\frac{12}{22}$ (54.5)	ゐ						
$\frac{86}{(97.7)}$	$\frac{820}{(98.0)}$	い						
$\frac{214}{(22.0)}$	—	ひ						
—	$\frac{36}{36}$ (100)	う						
—	$\frac{6}{6}$	ふ						
$\frac{3}{13}$ (23.1)	$\frac{28}{28}$ (85.7)	ゑ						
$\frac{1}{30}$ (36.7)	$\frac{12}{35}$ (34.3)	え						
$\frac{49}{73}$ (94.5)	—	へ						
$\frac{84}{101}$ (83.2)	$\frac{7}{7}$	を						
$\frac{18}{27}$ (66.7)	$\frac{3}{8}$	お						
$\frac{34}{64}$ (63.0)	—	ほ						

※ 本来の表記を保つ割合を例数・百分率にて示す。

※ 漢語「わ」「は」「ゐ」「い」「ひ」「う」「ゑ」「え」「を」「お」の

欄には、「複合語中、後部成素の頭部がそれらの仮名により

表記されるもの(例「茶碗」…)の例数を示す。「は」の

欄の2例は、「一把」「琵琶」。

※ 同「い」の欄には、同例数と「複合語中、前部成素の末尾

後部成素の末部の一方or双方がそれにより表記されるもの(

例「袪殿」「芳名」「佩帶」…)の例数とを併せ示す。

※ 漢語「う」欄・和語「ふ」欄の例数は、(2)関係の語例を含め

ればはるかに多くなるが、百分率にはほとんど影響が無い。

なお、漢語「ふ」欄が空いているのは、「平入声なども「う」

or「ふ」に表記されて、該当例が無いためである。

※ 和語「い」欄の例数には、「複合語中、後部成素の初頭が「

い」で表記されるもの」の例数39を含む。これを除けば、同

欄の数字は「 $\frac{45}{47}$ 」。

(5) 語頭の [i] [je] の表記についても本来の区別が失なわれ、和語

・漢語とも、「い」「ゑ」or「え」便宜・「を」or「お」

便宜の表記に依る。

(6) 合拗音の表記には「くハ」「ぐハ」を当てる傾向が強い。

三

資料②①④に見える付訓仮名の表記様式については、いまだ、詳

細な調査結果を得ていないが、概ね次のように云えようである。

資料①および②④は、所収語彙の量・内容において大きく相違するにもかかわらず、その付訓仮名の表記様式については共通する点が少ない。例えば、右に挙げた(4)の事項はほぼそのままに、また(1)の事項も若干の程度の差は有るものの、資料②④に共通に認められる。

その背景には、①日常頻出・必須の語の表記が資料①④を通じてほぼ同一であること、②各資料独自の所収語に増補する等々も、多くは、それら頻出・必須の語と構成要素ならびにその表記を同じくするものであること、等の事実が有る。

また、

資料③④には、語の表記と検索の問題に関わる次のような注記が有る。

資料③：「てうてうハ／此部ちやう／じやうハちの部／しの部に出」(「て」部の末)

「じ。じうの／類は此部／ぢ。ぢうてう／等の類は／ちての部ニ入」(「し」部の末)

このほか、類似の注記に開合表記に関するものがある。く・や・ま・こ・あ・き・め・ひ・も・せの部の末に有る。

「ゆふの類爰／に出スいうは／いの部にあり」(「ゆ」部の末)

「此仮名に屬する字口の(い)に撰め其かなを分ちてこれをしらしむ」(「お」部の末)

「お」部の末に「お」の仮名も同じく口の(い)の(い)に撰むかなに古今のたがひある／ものハ右ニ古かなを付し左に今かなをすす左ナキハ古今通用のものとしるべし」(「る」部の末)

資料④：「音かなづかひの取ちがひやすき／字大畧をしるす」

光(か)う・香(かう)燭(ろう)／相續(さう)く等(とう)石(い)石(い)燭(ろう)／此類(こゝろ)ハ兩方(りやう)を見るべし(冒頭「文字引様」の項)

「こゝろ」部・「ろ」部・「ろ」部・「ろ」部・「ろ」部
以下の語は、「ら」部にも掲げられている)

これらのことから推察するに、近世中期以降に成立した節用集は、その付訓仮名の表記様式の大方をそれ以前のものから引き継いだ結果、常に、引きにくさの問題をかかえていたものと思われる。

引き継がれた表記様式は一種の規範として尊重され、やみくもに改められることは無かつたようであるから、利用者の側は、ハオ段長音の開合VやハII連母音・拗長音Vハ四つ仮名V等の区別に關係するところの有る語を検索するのに、再三頭を悩ましたものと思われる。それでは日常事務用の辞書として機能性に欠けること明白であるから、利用者がより引きやすいものを望むのは当然のなりゆきである。検索の便に関する注記を欠いた資料①②の段階から、配慮の跡が窺える③④の各段階へと変化が見られるのは、辞書編纂者、出版者の側が次第にそうした利用者の要望——ないし消費動向——に応えて行った結果であると思われる。

近世の節用集は、表記の面でもより引きやすい形へと進化を遂げて行った、と云って良いように思う。

【注】

1 古今和歌集關係抄物・傍訓注記の表記様式と比較した場合、(3)の事項は共通するが、その他については若干異なつた様相が

認められる。(1)(2)については、むしろ、節用集の場合よりも混乱の進んだ様相を呈するようである(以上、本誌6号の拙稿参照)。

四

ところで、資料①には、稿末に示すような仮名遣い関係の記事が見られる。

これは、その末尾にも云う如く、水谷居秀の著作(『假名遣秘解』)より引いたものであるが、これと前に示した同資料の付訓仮名の表記様式との関係について触れて置きたいと思う。

同記事には、次のような仮名遣い原理が示されている。

い…漢語の語中尾／和語の語頭・和語の語中尾の一部(具体例として動詞連用音便形・形容詞連用音便形を示す)

ゐ…一字表記の漢語・漢語の語頭の一部(捺音綴尾を持つ漢語の語頭)／一字表記の和語の多く・和語の語中尾の一部(語形変化無き和語の語中尾)・「井」

ひ…(漢語には用いず)／和語の語中尾の一部(具体例として八行四段に語形変化無き語多数は音より)のひらハシにて書ハシを示す

ほ…地名人名表記に用いられる真仮名「保」／和語の語中尾の一部(捺音綴尾を持つ漢語のハ訓みVのーリト) (ただし例外有り)その他

を…(漢語についての記述は見えず)／「小」(アクセントによる仮名遣い)・「緒」「音」・和語の語頭の一部(習ひあり)・和語の語中尾の大多數・(このほか、「織」「尾」「桶」等の語の仮名遣いが、語の複合次第で変わることもまれがアクセントの違いを反映した使い分けがあること、等が述べられる)

お…(漢語の語中尾には用いない)／「大」(アクセントによる仮名遣い)・和語の語頭の大多數(ただし、アクセントの違いにより) (間々「と」を書く例有り)

へ…(漢語についての記述は見えず)／和語の語中尾の一部(例として八行四段活用阿下二段活用の動詞)・助詞「へ」(このほか、「に」もまたひらハシにて書ハシるものがある)・「い」を用いるべきであるが、字の書き具合が異なるので、まじりを用いること等が述べられる)

え…漢語の語頭の大多數／一字表記の和語・和語の語頭の一部・和語の語中尾の一部(具体例としてヤ行下二段活用動詞ハ行ウ行より転じたいものを含む)

え…一字表記の漢語・漢語の語頭の一部／和語の語頭の一部・和語の語中尾の一部(語形変化無き和語の語中尾)

は…(漢語についての記述見えず)／和語の語中尾(和語の語中尾に「い」)・(このほか、語頭の「わ」は「は」にて表記) (「い」は「は」に「わ」が返べられる)

ふ…ハ入聲字V／「生」・和語の語中尾(才段長音・ウ段短長音) (関係の和語の語中尾)

ふ…(漢語についての記述見えず)／和語の語中尾(特殊な例を示す) (また、前項に入るべき例を示す)

へ…(漢語についての記述見えず)／和語の語中尾(語中尾の「め」を表記する「ふ」)

＊1 ここに云う語形変化は、動詞・形容詞の活用のほか、名詞の露出形・被覆形の交替等かなり広い内容を持つものである。

＊2 暗喩要語として挙げるものであろう。この記述中にハならハシにて書Vとして挙げられたものも、そうした性格を色濃く持つものと思われる。

＊3 該原理をやや誤解しているふしが有る。

＊4 アクセントによる「お」「を」を使い分けの原理については述べたものであろうが、十分に理解し得ていないふしが有る。

＊5 以下の項目は、「読み方についての解説」というかたちを

取っているが、また同時に、「表記に心すべき暗喩要語一覽」といった性格をも具えたものであろう。

これと、第二節に示した資料①の付訓仮名の表記様式とを比較してみると、次のようなことが指摘できる。

。「い」「る」「ひ」「ほ」「を(語中)」「へ」「え(漢語)」「ふ(和語)」「へ」「ふ」の用法は、ほぼ一致するが、「を(語頭)」「お(同)」「え(和語)」「え」「は」「ふ(漢語)」の用法にはかなりの相違が見られる。

これをどのように評価するか——資料①は「假名遣秘解」を引いて雑書の記事の豊富さを示したばかりでなく、また実際、それを付訓仮名の表記に利用した、と見るか否か——なかなか難しいところであるが、現在のところ、筆者は、「秘解」の影響したところが全く無かったとは云えないが、有ったとしても、その範囲はかなり狭かろう」と考えている。

その根拠としては、「秘解」刊行以前に成立した辞書中に、やはり資料①と同様の表記様式を持つもの(現在、詳しく分析中)が有ることを挙げて置けば十分であろう。問題は、むしろ、「秘解」の表記法と辞書のそれとの共通性がどのような事情によって生じて来たか、という点に有ると思うのである。これについては、今後なお検討して行きたいと思う。

五

以上のことから、本稿冒頭に示した(1)(2)について次のように云うことができる。

(1)資料①②の如き近世の節用集に見える付訓仮名の表記様式は、

第二・三節に示す通りで、

i. 「日葡辞書」式の表記体系を基準に考えれば、若干の混乱有りとしなければならぬものの、その度合いは、古今和歌集関係抄物に見える傍訓仮名表記の混乱度よりも小さい。

ii. その背景にはやはり書承性が有るものと認められるが、それがどの程度のものかは、現在のところ明確にしがたい。

iii. そうした表記様式と当代の仮名遣い書の記述内容との間に少なからぬ共通点の有ることは確かであるが、それがどういった事情によるものであるのか、なお検討を要する(第四節参照)。

(2)それらの節用集は、音韻の混乱(および表記の混乱)によって生じた引きにくさの問題を、表記方法の改善によって乗り越え(ようにとした)。

——鹿見島大学講師——

※以下に、資料①所引仮名遣い関係記事の翻字を示す。参照されたい。

假名づかひ目録

一端のいの事

一中のの事

一奥のひの事

右のいの三字ミナロにて
よむ時ハハつにいとよむる
是によりておのく書ちか
ゆる事也故に其わけを註す

一端のほの事

一中のの事

一奥のひの事

右同斷

一端のへよこの事

一中のえちミエの事

一奥のえの事

右同斷

以上九項ノ「の」ノ字体、上ノソレハ全テ「乃」
ナレド、下ノソレハ、初三項ニテ「し」、中三項
ニテ「の」、後三項ニテ「れ」ナリ、各項内容ノ
関連ヲ示唆セシメタメノ作爲ナラン。

- 一ふの字うとよむ事
- 一ひの字いとよむ事
- 一への字えとよむ事
- 一ほの字をとよむ事
- 一をとよむふの字の事
- 一めとよむへの字の事
- 一むとよむふの字の事

667

性命敬榮禮悔來
等ノ類ナリ

又訓の時字頭にハ皆と
端のいを用る也

今射軍至東息否

諫諭等ノ類也

又訓の時中に用るの
例には

凌縦排燕粉等の
たくひ尤まされ安し

又字の下に用る例にハ
好惡旨辛苦酸痛

等の類也

右の例を吟味して此
外を知べし

○中ののの事

中ののハ音に用る例
には位意威遠伊

圖委等の類ひナリ

又はね字の音ハ惣て
中ののを用る事也

陰院印音因句達

姪飲のにくひ也

又訓の時字の中下に
用るは大やう何れに

も通ひ用るなり通ハぬ
時に違ふ例也

677

竟新沈水鷄初冠
位紅飯胡熊宿直
類次類愁魂曉山
藍椎茶

又一字訓の時多ハるの
字ナリ猪伏猪亥子

集集居超居などの
類ナリ

又井の字も中のの
なり三井寺三井大井

川おほ井井里の里
雲井くも飛鳥井す

かのの類也

○奥のひ

おくのひハ音の時用る
事なし訓の時に大方ハ

ふへの三字と通ふ時に
書事也

勢いきほひ

伴とともなひ

逢あひあひ

争

飼ひらひら

拾ひらひら

争

争

争

争

争

争

争

争

争

争

争

争

争

争

674

684

向むかひ 這はひ
なごの類ナリ

又訓の時なにかよひ
もなければとも昔よりの

ならハしにて書侍る
およそ其例をあげバ

相互怨基際或平

開齊笑驚斷翼

災類領時晚鐘

弥生昨日兄弟甥

姪の類數多あり口傳

○端のほ

はしのほハ本字に保
の字を書たるハ勿論

保ほ同じ事なれば上
よりのうつりにてを

とよむなり

松保浦のうらと云伊

香保沼のめをぬま

仁保海にはとふミとロ

佐保姫をひめる類

なり又ほの字を書て

をとよむ事ハ音のはね

てよむ字は大やうほ

の字を書てをとよむ

なり竿畑潤掩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

郡庵董廉塩

682

687

嚴重漫妍類

のたぐひなり

又はね字にあらね共

ほの字を書き事

香催競 松勢比

仰。公。人王。大政大臣

正親明。大納言。關。覆

垣生。花菱。打龍鐘

などの類なり

又案にはね字なれど

も訓母によりて子字

にをの字書き事あり

たとへハ鯉遠などの

類也よく思案すべし

○中のを

中のをハ輕き字なり

故に小文字を本字に

書きたるは皆中の

をなり

小手巻。小島。小三袖

小比叡。小倉山。小船

小塩山。小車。玉小柳

小鹿。但男。美ハ。小河

小田守。小山。小指。指

本訓をよび也。ヤハ上

没してよびなり。常にハ

よをゆへ三五相通の類

704

又緒の字何の緒にても

皆をのかななり

琴緒。王緒。袋緒。鷹

經緒。緒。絶橋の類也

又音の字も中のを也

音無川。音信。鐘音

鞠。音水。音川音

の類也

又自己各恐押

置追教。穩。送。練

居躍補。運。後。起

與。翁。叔。父。叔。母

姓。落。終。眷。急。劣

などの類いづれも上

にかく時なれども

中のを書ハ習のある

事なり

又字の下に書ハ多

ぶん中のをなり。十魚

などの類わづらハし

く出し侍らす

案に幼稚の字を或

抄におさなきものと

書ハ訛なり。中のを成

べし。又男の字もをのこ

と書時ハ中のをなり。おと

こと云時ハ與のおなり

707

男山などの類なり

又織の字も只織ある

とばかりハ與のおにて

錦織。織姫。などいふ時

は中のをなり

又尾の字ハ本與のお

なり。故に尾張と云時ハ

おはり。と書なり。されど

尾張國と申時ハ自然と

尾の字上聲になる故

をハりのくにと書き事也

又桶の字ハおけ也。是も

二桶と云時ハおのかな上

聲に成て来る故にかな

かやうのちがひ有て中

のを與のお分別有事也

○與のお

與のおハ重し。故に

本字に大文字を書きた

るは皆與のおなり

大宮。大埜。大沢。大

内。大政大臣。或人

問て云大政大臣大納言

のおほい。の假名に端

のいをか。く。度。ハ。い。かなる

仔細か有世の書を見

714

るに皆ひの字又ハ井

の字を書て有之と

答云是ハおほきおほく

など、通ひ有ゆへいの

字よろし

又或抄に机。教。女。

推量などのをに與

お書ハ誤なり。いづれも

中のをしかるべし。惣て

上に書假名ハ多分ハ與

のおなれども間にハ

中のを書侍るハ皆平

上去三聲のたがひ有て

かわる事なり。知人罕也

又思惜。行。拝。覆

買。面。與。翁。長。同

彩。泳。龍。受。驚

境。茨。安。任。落。魄

正親司。折々時々

などの類皆此おなり

又尾上。松尾。虎尾。馬尾

山鳥尾。垂尾。美濃尾山。

是は尾の字なり。など

與のおなる故なり。など

の類いか程も有皆同じ

又音の時字の下ニ與

○端のへ

729

724

端のへハひふへの三字にかよふハ皆用中

敬(うやま)へる 養(やしな)へる 縉(しん)くろへる 縉(しん)くろへる 賑(にぎ)はる 賑(にぎ)はる 失(うし)はる 失(うし)はる 祝(いわ)ひる 祝(いわ)ひる 准(すん)はる 准(すん)はる 移(うつ)はる 移(うつ)はる 掃(はら)はる 掃(はら)はる などの類也

又此外にふへに通ふてひを除たるも有

更(ま)かへる 計(か)はる 植(う)へる 緒(は)はる 袖(は)へてをりはへて 押(お)さへる 仕(つか)へる 堪(た)へる 存(ぞん)なからへ 加(か)へる 唱(な)なる 弁(べん)まはる 答(こた)へる 交(ま)じはる 貯(たく)へる 栄(さか)へる 支(さ)へる 備(そな)へる 調(と)のふるも 扣(ひか)へる 拘(かう)へる 迎(むか)へる 勘(かん)がふる 捕(とら)へる 踏(ふ)まはる 訴(う)つたへる 教(おし)へる などの類なり 又何(な)にかよひもなき 字(じ)なれ共(とも)ならハしにて 書(か)き侍(ま)はる 偏(へん)歸(き)古(こ)妙(めう)敢(かん)轉(てん) 諾(だく)刺(し)苗(めう)後(ご)扣(こ)肌(し)

1737

1734

故(こ)問(もん)無(む)敵(てき)白(はく)妙(めう)堪(た) 兼(か)一(いち)重(じゆう)二(に)重(じゆう)九(く)重(じゆう) の類(るい)又(また)八(はつ)都(と)へ東(とう)へどこへ かしこへなどの時(とき)も端(はし) のへなり蓋(がい)かれこね かけるかなに字(じ)なり わろきもあれバ端(はし)のへ 中の江(え)製(せい)のえなど おもひの外(の外)にかける 事(こと)も有(あ)り熟(う)まく 味(あじ)ふべし 又(また)案(あん)に声(こゑ)の字(じ)古(こ)来(らい) こゑと書(か)はいふかし いかにといふにはひふへ ほの五(ご)音(おん)に通(か)ハせ見る に聲(こゑ)色(いろ)音(おん)高(たか) など、申(ま)なり然(しか)れば 五(ご)音(おん)にかたよりて はに通(か)ひ侍(ま)はるなれば への字(じ)書(か)べき事(こと)なり さりながら上(かみ)よりの ついきにて字(じ)形(かたち)の よからめところなどハ 用(よう)捨(す)べし世(せ)間(ま)す べてゑの字(じ)を用(もち)ひ來(き) たり

又(また)上(かみ)の字(じ)もかなにむ

1741

かしよりうゑと書(か)て 疑(うたが)ふ事(こと)なし予(よ)おもふ にへの字(じ)なるべし五(ご) 音(おん)に通(か)せ見る時(とき)上(かみ)皮(かわ) 上(かみ)上(かみ)類(るい)など、申(ま)也 然(しか)バはの通(か)ひ侍(ま) するゆへにおそらくハ 端(はし)のへならむ尾(お)上(かみ) などの時(とき)も勿(な)論(ろん)也

○中のえ 中のえハ輕(かろ)し故(ゆゑ)に 訓(しん)の時(とき)にぶんやの ゆえよの五(ご)音(おん)に通(か) じてゆえ、と通(か)ふ 字(じ)ハ皆(みな)中(ちゆう)のえなり 越(こ)えゆる消(き)え見(み)ゆる 聞(き)きこゆる 絶(た)たゆる 燃(も)ゆる 覚(おぼ)ゆる 寒(こゝろ) 愈(い)ゆる 肥(こ)ゆる 萌(も)ゆる などの 類(るい)なり 又(また)字(じ)頭(かぶ)には 榎(えん)木(ぎ)枝(えだ)撰(せん)の類(るい)也 又(また)一(いち)字(じ)假(かり)名(な)には 得(え)柄(がら)などの類(るい)なり 又(また)音(おん)の時(とき)は 縁(えん)の字(じ)などの類(るい)あま た有(あ)り事(こと)也(なり)女(に)の文(ぶん)などに

1748

ゑにし御(ご)ゑんなど書(か) 事(こと)あししえにし御(ご)ゑん など、書(か)べし案(あん)に 此(こ)かんな紛(ま)ぎ、事(こと)多(おほ)し 或(ある)ハ答(こた)えなどはや るゆえよのひきにて 中のえ也(なり)又(また)備(そな)へる 植(う)ゆるなれども備(そな)へる 植(う)ゆるなど、はひふへ のひきにて備(そな)へる 植(う)へる、と端(はし)のへを書(か)べし 又(また)唱(な)の字(じ)もとなふ となへてとふへの通(か)ひ侍(ま) れば端(はし)のへ也(なり)此(こ)類(るい)あ またあり又(また)或(ある)抄(せう)に 笛(ふえ)の字(じ)ふえと書(か)は 誤(あや)まり

○與(よ)のゑ 與(よ)のゑハ重(おも)し故(ゆゑ)に 中(ちゆう)のゑを書(か)と通(か)し 意(い)にて訓(しん)に用(もち)る時(とき)字 (じ)の下(した)にひきあまたに 通(か)ハぬ時(とき)大(おほ)方(かた)此(こ)ゑを つかふ 檜(ひの)杖(じゆう)杖(じゆう) 末(すえ)向(むか)後の類(るい)也(なり)案(あん)に 前(まへ)後(ご)の字(じ)などまへ しりへとあまたに通(か)

1761

1757

ひなきに書は習ひ
ある事なり

又字頭にハ笑笑顔
などの類也

又音の時一字假名
にハ會惠繪衛の類也

案に衛の字女の大
などに左へもん右ひやうえなど、書事あしし

左えもん右ひやうえなど
と書べしかやうの事

平日のたしなみか
又音の二字假名にハ

映越園栄猿猴
烏帽子の類

○はの字わにむ事
はの字ハ字の中下に

用る也障哀弱強
偏兵涿川庭など

の類假名にハはと書
て口にはわと吟する也

此類あまねく挙る
に及す必文字の中

下にわを書べからず
去ながら是に紛る、こと

多し考べし
又字頭にわと申時ハ

1767

必はの字をかく事なり
かへ前下に委し

○ふの字うによむ事
是ハたぶん生の字を

本字に書たるハふを
書てうと吟する也

芋生浦武隈生松
芹生里刈生丹生

園生枯生蒲生栗
生垣生翠生松など

の類なり案に或
人前に出せし垣生の

かんをうたかひてかき
をにても有べきかと云

へり予が云此垣生の
かなにて前とてらし

合せて見るべしはひ
ふへほの五音通ふ中へ

垣生かき垣生かきかな
に極るといへば或人較

まどひを解けり
又其外にも引て吟

するはふの字なり
祝子近江昨日今日

大夫扇棟結實
蜻蛉申行違最
愛などの類假名

1771

にはふと書て口にハ
うと吟する也また此

外にも唱備喩など
は前にも出せる通

はひふへほの五音に
かよふ故ふの字をかく

事ハ勿論なり
又音に入聲字を別

て唱ふる時ハふの字
を書事也

堂塔法師。蝶燭。
貨。乘。世間素の

書はまの類也安るに
堂塔だうにふと書

べし塔中など云ゆへ
ゆめ、くどうたうなど

書べからず又法師など
も吟味する上からは

はふしと書べしいか
にとなれば法度法替

など云時ハ法の字はつ
の声なりほつとほつ

けんとハ云す然れば
はふし成べしされ

どもものによりて字
なりわろき故ほうし
とも書べきなり

1781

○をによむふの字の事
仰願扇奏上など

の類なり
○めによむへの字の事

押並女郎花露沢
崇などの類なり

右の二條毎字ある
事なりよく味ふべし

○むによむふの字の事
頭蒙浮荒撰。嘯。

戲油煙訪傾睡
士哀憐などの類也

右ハ水谷居茶のえらぶ処
の假名づかひ諸抄の及

バざる好書なり